

平成 26 年度第 7 回小学校ゼミナール記録

2014 年 12 月 23 日（火）

参加者：市村（授業者）・影山・原・山田

1. 討議内容

今回の小学校ゼミナールでは、広島大学附属小学校研究大会に向けての指導案の検討を行った。我々の班の単元は第 1 学年の「かたち」であった。授業者は、学習対象が目の前にあるにも関わらず皆一様に「同じに」見えないのが図形学習の課題の 1 つであると捉え、「違う」「同じ」「似ている」という観点から形を読み取る見方を育てようとしていた。具体的には、提示した図形（4～5 つ）の特徴からいくつかの図形に分解し、その分解した図形どうしを比較し、種類や数、位置や向き、大きさから「もとの形」と、「同じ」「違う」「似ている」という見方を育てることを目標としていた。図形を組み合わせで新たな形をつくるという題材が多い中で、今回の分解を題材にし、図形の内部の線、分解の線に着目させることは発展的であるといえる。討議の中では主に以下のように問題点が指摘され、それに対する解決策が見出された。

問題点 1：全 4 時間の授業の前半は「内部の線ではなく、形をつくっているまわりの線が重要」であることをおさえておきながら、この第 3 時の授業で分解を取り扱い、児童に「内部の線が重要」であることをおさえさせるのにずれが生じているのでないか？

問題点 2：授業の終盤で提示する予定の、裏返せば重なる図形の取り扱いについて、「裏返して重なる図形」も「同じ」であると認識させるのに分解という行為はどのように貢献できるのか、どのように意味づけをするのか？

解決策 1：児童の活動の始点となる発問を「どのように見ると、同じかたちとわかるのだろうか？」から「どのように変えれば同じ図形になるだろうか？」に変更し、この答えを共有した後に、改めて周りの形が重要であるというおさえをする。このように変更することで、児童が自然に図形の分解に目が向き、また、児童が図形の形を変更後の結果、つまり、周りの形にも目を向けるようになる。

解決策 2：まず、一貫して「回す」「ひっくり返す」「動かす（ずらす）」を明確に区別させておく。授業の終盤に、児童がある変更をしたら、裏返せば重なる形が現れるような図形を提示する。そして、「このように形をかえても同じ形になりそうですか？」という質問を教師がする。それは違う、または似ている形であると主張し、今までのように分解・変更を試みる児童に対しては、長方形の対称性から、児童がそのときに行った変更は「ひっくり返した」ことと同じであることをおさえる。

2. 今後の課題

課題としては提示する一つ一つの図形に対して十分に時間が取れないことがあげられた。研究大会にむけて、提示する図形それぞれに対して児童におさえさせるべき事項の明確化をし、時間を短縮できるように努める必要がある。

（文責：原）